



奇譚
自來也後編

自來也後編

~ 13
3329
8



13
3329
8

報仇自來也 說話後編 卷之二

大正十年八月廿九日
本大學出版部
贈

武江 感和亭 鬼武 著

勇侶吉郎 正輝 搜自末也 行衛併 自末也 權為海賊 糸

儲且越後國 推津 國父々 勇侶吉郎 祖父 父世の 仇 討 立 歸 不

加恩あり 源太師の家名 相續 做 せ 西天草々 自

末也の手 預居る 由 家 重寶 權 血 賊 手 渡 した

申 他 邦 園 奈 何 一 日 侶 吉 郎 を 召 右 の 次 子 を

立 歸 吉 命 と 蒙 り 侶 吉 郎 畏 り 選 小 客 路 粧 あり 妻 此

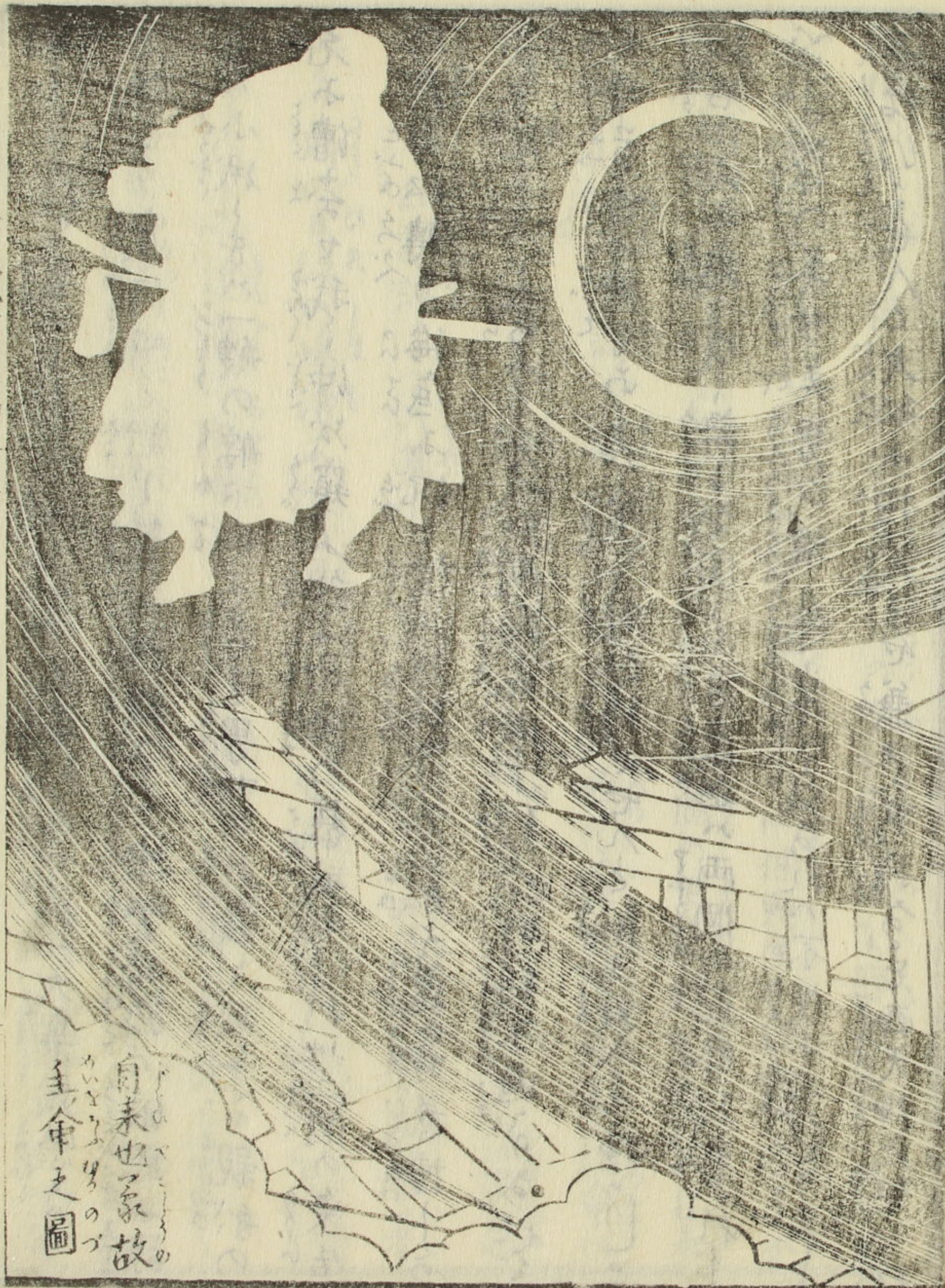
美鳥 小 権 一 の 別 と 告 帝 一 個 相 及 鎌 倉 志 越 後 の

天正十一年八月廿九日

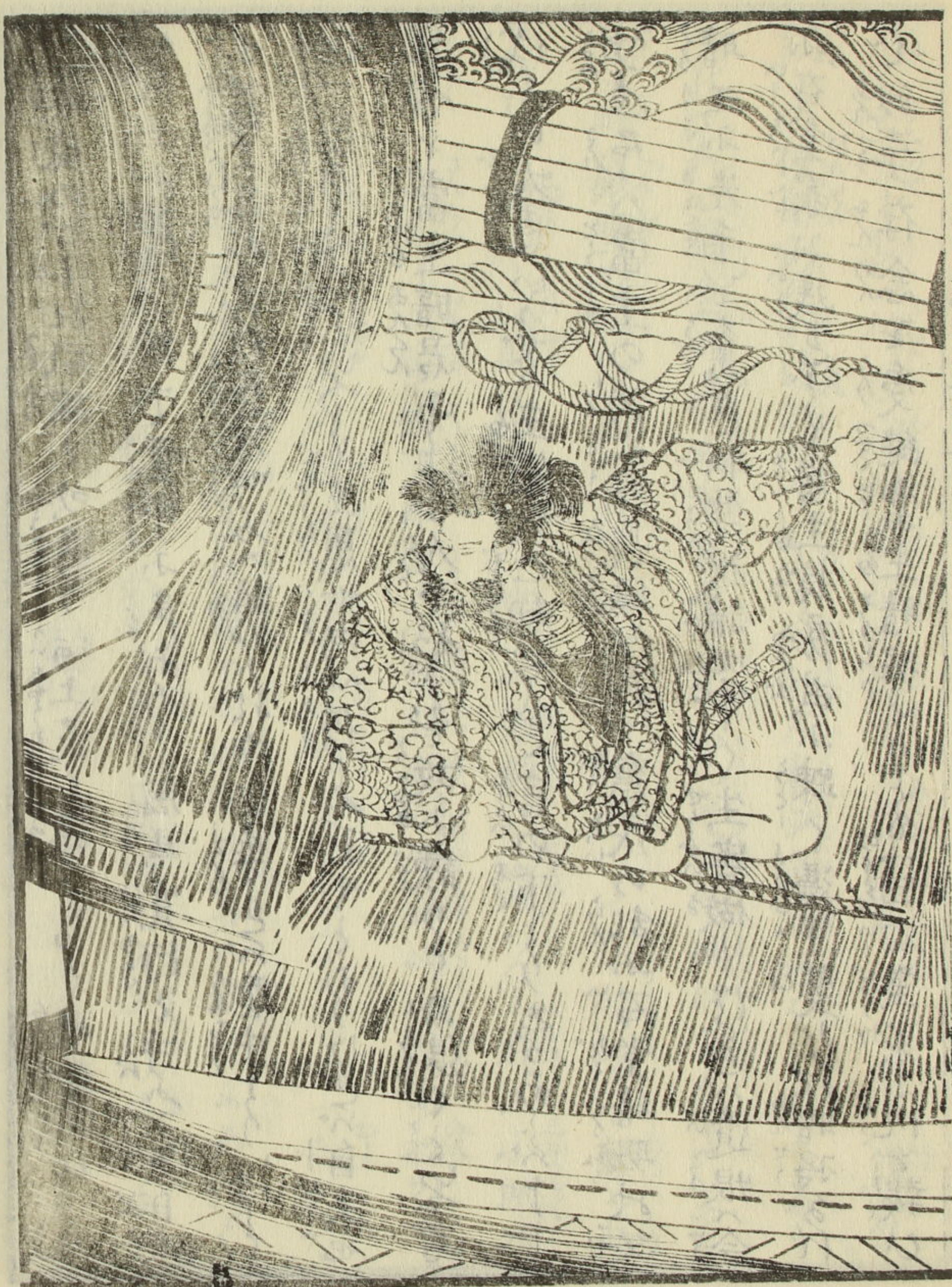
國と立出まれば傳ひ同國新浮の港より賈舶東海を廻り鎌倉へ
 到るの便船あれば這ふとあり日和成看必定出帆をぞ做しあり
 りれされば鎌倉の邊も自末也といふ盗賊徘徊するはしめて
 僉義嚴重なりけし自末也這度汝知りて小嘍を轆め商
 義なり權く海賊とありて世上の動靜を窺ひんと暗小賊汝
 諸處へ散れ大船船下船等と補裡相列三浦岬の沖におかし
 ろく沖行買船まづの荷物と掠め或時陸より諸所へ挿入さ
 ら属械を罪ふて世のまは窺ひせ廻向其身の親船ありて
 ちがひ嘸ありけれ處にあつた暮小嘍も大半侍馬好し
 打あり賈船やまると沖に遭出せ跡あり自末也一個ありつ

が暴風のごとく風颯と吹送り海上荒く浪もしく峽雲一ひり此
 船の上におぼし掛て雲中小声ありて周馬寛行と呼ぶ自末
 也篙より立ちあられ呼ぶ誰かやと尋ねば雲中よりいつく
 汝一回身退くといふも主恩如何心得と云れやとありけし自末也
 答へて當主暗君ありて人を知らずと故に諫め身退くといふも
 代々の大恩いつて主家汝亡却せんと云の下よりあつたがし
 ぞん平の當主の父三好長滋がれが應永の乱お石堂暗君は父
 暗正お先手を棄てて耻辱を請ひて生害做しはし遺恨へ今
 お石堂家お残しども當主長房武お疎く憑甲斐お暗將あれ
 心汝予存念を受継當主暗君より一回お石堂家お仇と報ひ

自才世言後備卷之二



自來世の家故
の
主命之圖



引くは海を安んじたりよはけりか底見届けしは這一大事な思ふなり
 とびより寛行呼と計り篙小低頭ると中雲暗流り浪穏み静
 且べ小舩もハ一艘の舩下舩も若き男女の死骸と取ふせ親舩の
 元小漕ませ我々仲成窺ふ処より即今の暴風小ほれ此二個の乗居
 たり小舩轉り海底小沉と漂ふ舩祐中人と舩を遭寄惹撞りの
 ども多く水と食ふと入如斯溺死做し候か時刻不過りあれど
 天晴首領の術もあふ命と救ひ得させんと舩小取入とほりしと
 流石小人小鬼もあつ語を聞くと自來也ハ兩個の死舩取看れり
 此とて答の美女美男瓜端尋常さほあれハ不便小思ひより
 某祐いせん大舩小拘へ入らせ兼く可持ると西天舩の包と以

兩個の死舩を撫回と少を忽救外の水吐出り眼を睜開と小賊とも
 と打あつては後へ介抱ると程小遠小兩個甦生しけれハ今了不
 始西天草の奇特と不審りれ斯く兩個の男女甦了めれハ自來
 也ありし次序と語り復二個の動靜取尋ると那漢子と活命の
 恩を謝しとて誰人か不存とも我々の命を救ひまはる洪恩
 不隱子細説語り入某と石堂暗眠の家臣吾川采男といふ者
 するが前の日江の嶋流りての過往不圖も這かり女と契りて結ひ
 其者とも討捨其場より立退然れども陸地へ追人の尋あを
 懼き海辺ありあふ小舩入りあり三浦の邊へ落行人と此海

上へ乗出せし處に卒の大風原未不馴る業あり船漕ぐるも
 漕ふはせせと遂に船を轉て弱死做しけりしなり亦此女を同
 藩中より万里野破魔之助と申す者之妹と名を江と申しけり
 詳ふ事取り自來也何想ひん江の事を取先程より看とて觀
 ほど艶なる容貌今より予が圍中の伽を做せさせし采男と申
 んと命替ア予は船中の炊ありとも動じざと固く呆る西
 個始め小嘸嘖等も茲まぐ女小公不移首領の如何ある意より
 むひいと合眼してぞ私言りれ采男の口惜と申ひるが自來也
 向ひ品ふりてハ女も妾小進させ予も下人とも成るが先足下の各
 と如何と尋し自來也呵くと嘆ひ品ふり及つと否應け言はし

不引今より女ハ予が妾謔言吐ハ汝ハ帝今踏殺らん某汝誰と想ふ
 實名の尾形周馬寛行是名ハ自來也といハ盜賊の首領斯名乗
 りハ屬賊といハ其通不マといハ主マ歸ハ囊の嵐返答の一言
 ハ生死の境と照映といハ采男ハ怒りの顔對と做盜賊自來也といハ
 カハ同捨カハぬ息ハ仇是語せよハありハハハ技撃手ハ真向丁と
 切張とて西天州と所持做しされ不ト死刃の自來也事事もせば白
 刃抵取腕と申采男を握ん高へ去出し予ハ刃向ハその小路
 汝等能ハ討くと言の下より小賊も始の情延替り手捕足捕周捨
 るハ非刀の采男と宙子惹撞海へ遠ハ投込り茲とんれり江
 と呼し叫ハ魂ハぬハ氣絶せり自來也小脇ハ延拘ハ船底ハ

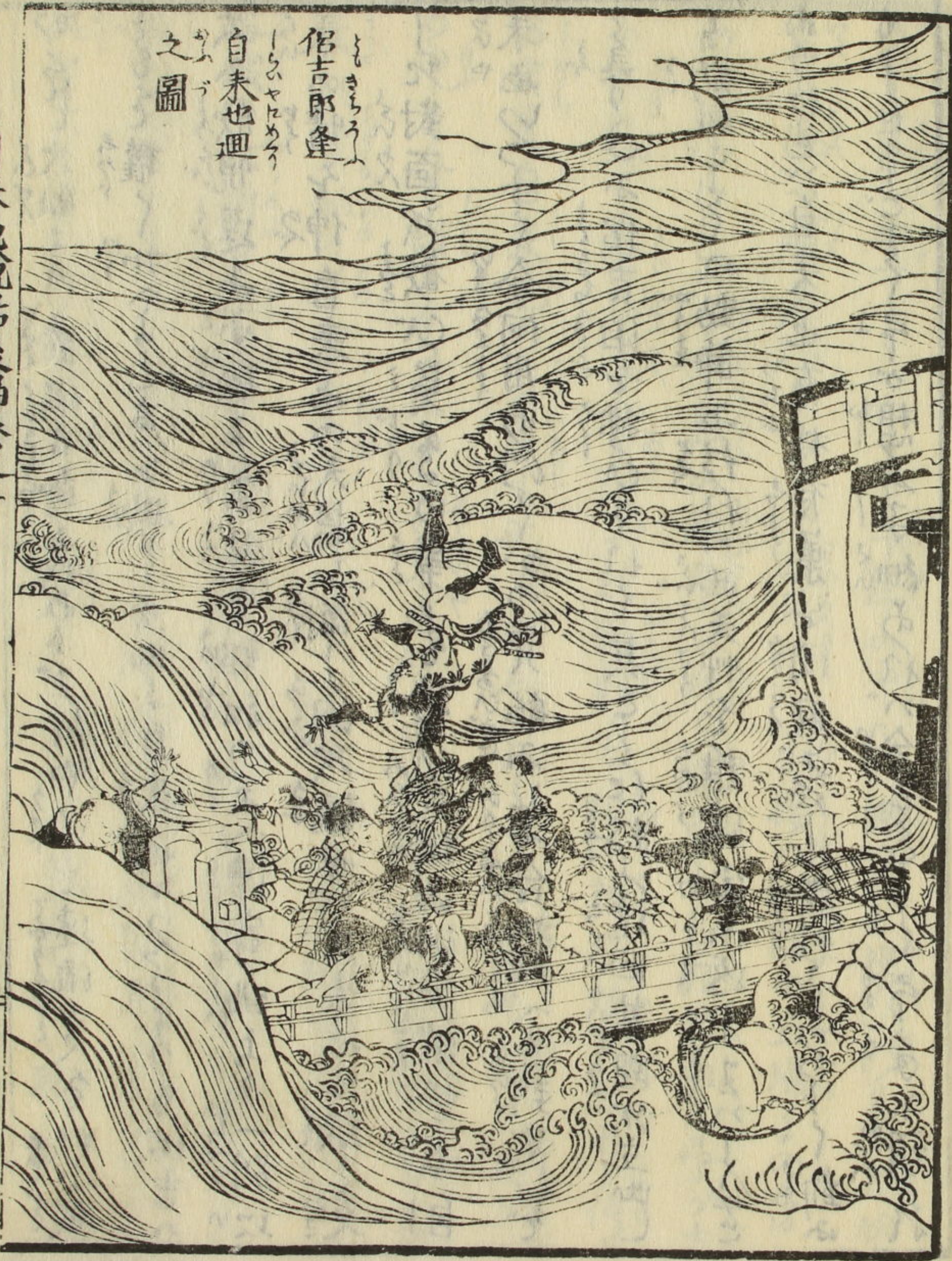
あそ入ふちれ

勇侶吉郎於鹿嶋沖逢難風併自來也劫賈船而

于侶吉郎爲對面糸

去程ふ勇侶吉郎ハ新海の港より賈船ふりて東海と巡り録
倉へと艫ふ處ふ常陸の國鹿嶋の遠沖と見えし邊りゆく卒
大風吹起て海上一面黒と流せりて高波船撞と打越既中搏
らんそそつれづ糸組の者ども髪を切水神へ誓をかり搗とら折
碇を打込杯とて茫々たる漸く半日風靜て何國の沖ともおぼ
夜中吹流とせし處小逢の沖ふ火の光と見えし處と目當り楫と
直糸跟ふも茲と看く多くれ小船漕ぎあつたの船と取囲

頓々大勢を移時下の船へ荷物と運べ始のむぐ助船も付
せれやとつた糸組もなはれしと遊くお奪ひとり漕行動靜と
糸組の商人ども這者何所へ運送とやと答れば口はふりて
我々海賊に渡せと故とりのぞ命惜くは荷物残らど渡せど最前
火の光りを見せりも此所へ偽引出さん計畧なりと同より糸組一同ハ
悪く海賊荷物と不遣と争へば盜賊どもハ腰刀惹枝切ちり夜中
とい空掻曇り火光もあつね船中ゆへ糸組大いハ噪動ると地
小侶吉郎ハ原より海賊と見えしれハ調度を做し高小斬出
められを伴ひ圍撃ふ盜賊どもと切散し海へ切込働くら夜ハ
少見と明渡り風靜とて雲暗とて同僅小隔とて沖ふ



しんきりう
侶吉郎逢
しんやれめ
自来也廻
之圖

自来也説話後編卷之二



自来也説話後編卷之二

六

かたし大船より勇侶吉郎あつたや必と速流度なれ小賊
 ももを權く扣へよと声を掛く立出る自來也をみるよりも侶吉ハ
 大不欣悦還ふ小船より糸移て那船のえへ漕寄跳より一別以
 來の情を伸自來也の大恩と謝し泪次流せば自來也も緩く又
 して對面双歡び笑するの事も語り合俱ふ泪と催せし自
 來也いつく今何用あつたかの賈船ふ糸合此所へと到りしぞ
 と尋ぬ小侶吉泪を拂ひされを其とくに作し這回某國に立出
 と斯のごとくの動靜あつれば西天州を推津家へ返り玉り人を
 ありけしバ自來也も有枝有葉を因取るが考つていつく前ふ
 もアせしごとく早が想ふ子細あれは今とていつく早も預れ

ざー某が望むつとも半年の中ふ調人と想ひけむ其奴ふ
 至り汝も渡さんらりある西天州と不接ハ汝國に立歸るの事
 あるはどけと今半年の間予も巡り過るといほ其中ハ予が方
 止せし帝今返りあつた動靜と遠く語りやんとあつた不
 侶吉も自來也の言不もあつたとあつた某も權く足と止
 り申さんと諾しつたゆ自來也もいつく汝今一同ふ糸組
 來れ賈船の者も不便あつた想ひげれと此はふ祐歸りかふ予ハ
 海賊の住所を注進せんハ必定なれ一個も残らど生てぬ人事
 難つととりあつた侶吉のいつく身の在處那者もの口より
 死なんとあつた疑ひをいふ今何の幸もぬく殊母ハ某

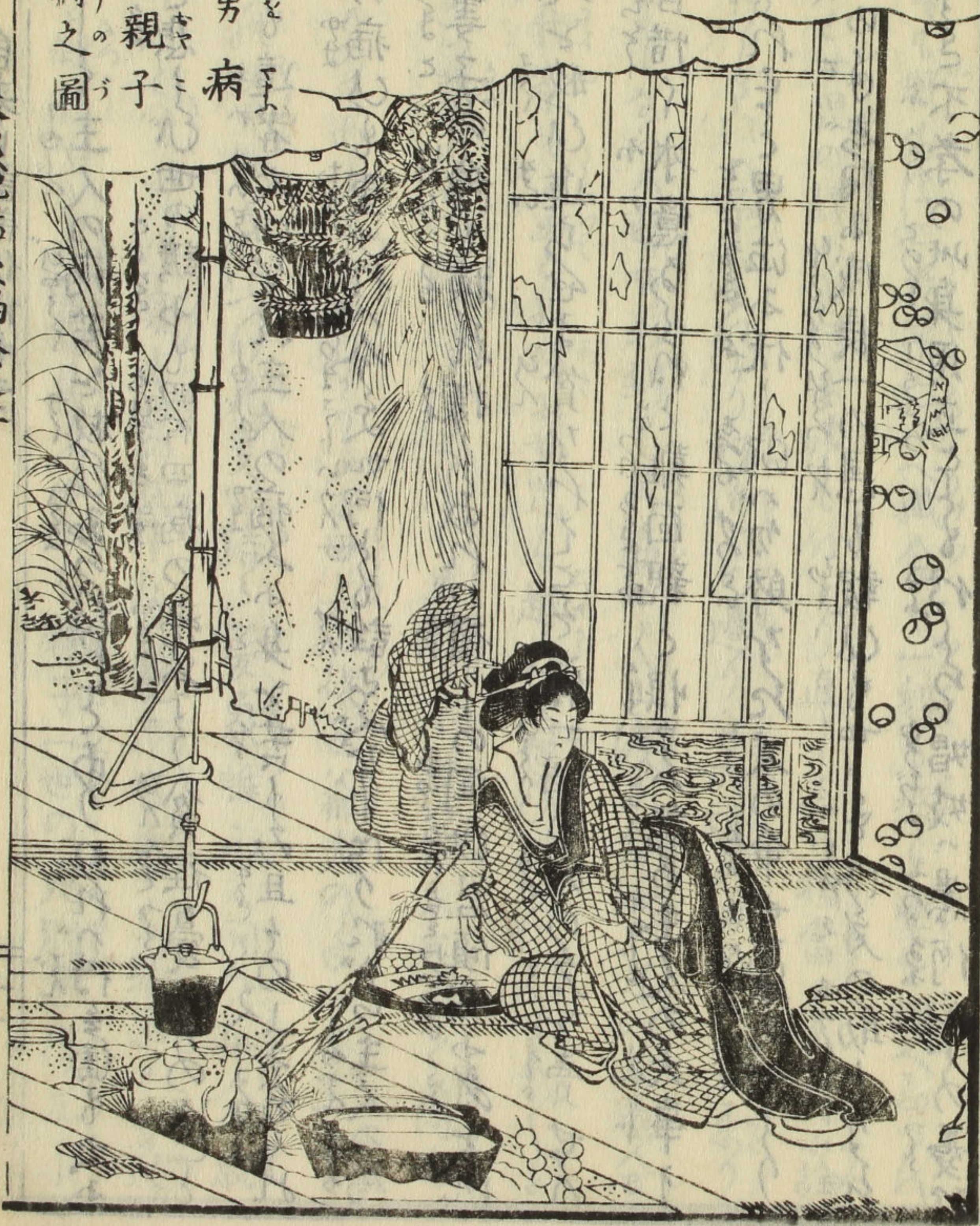
越後より乗合する者ども故一入不便存ざればなるがう夏小付
 らが一命の饒一入とせしむる自來也頭を振大事ハ小夏とて
 起て蟻の一穴堤を崩との緞令倭の志憐ふ延とんハ大丈夫れ
 所為小あんと看よく帝今那能と移へ一入とせしむる印と
 結ひは小呪文と唱へつ切拂ふと入るが卒ハ大風吹起荒波
 立ち那船を震あけ長下四双浪槽と打越ありやとうるうら忽
 小那大船と碎散り乗合人一個も不残底の藻屑と沈じしハ
 表とひりり光景なり茲自來也の奇術あり己とが船と悪
 かり浪平ふ風納ついと長尔なれ快晴ありるると
 援嶋金吾救吾川采男併金吾女兒贖身而祐吾川糸

馬小相列三浦の岬小近未信る傳兵衛とつれ獵師ありるが
 一日例のごとく小船より乗沖小漕出網張下し魚獲と做すふ
 投必細小何やん急掛てわらぬ網の損せん夏と懼と僻静ハ
 追と延上るればしむと半死なれ漢子の水小溺也動静たれ
 と驚れながら船小延擡さむぐ介拘みし水を吐せ用意の藥
 次へへらして衛人公地附ちれば我家ハ伴ハ何國の人と尋
 小不那漢子傳兵衛の實意とん屈身の上れ始終を説話吾川
 采男といつるのじと名乗されハ侍兵衛とて驚きと手を打て云
 らく元某と尊父ハ仕へ若黨援嶋金吾とヤせし者あるが
 君しむと三歳の頃侍女留とヤと女と密通露頭の上暇あり

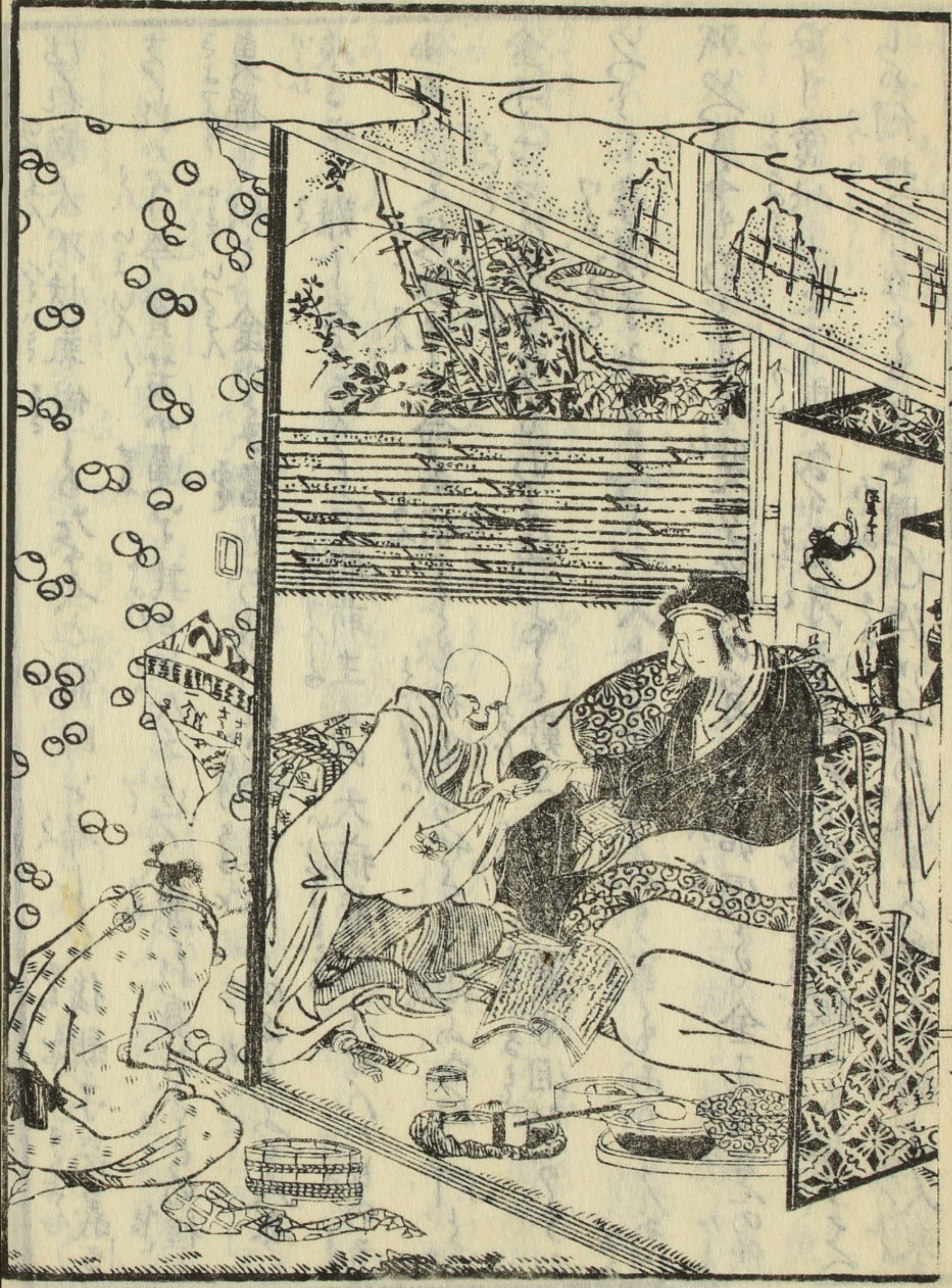
那女の在所遠かりしに浦に到りて一個の女兒を設け留へ産後不
 身なり當時十七才の女兒と其二個困窮の立氣小逼り魚
 鱈以業とし其日を送りけりも古主の尊兒子斯る難義と在
 り先我家不足を傳ひ心置かり保養あはせしといふ懇
 款待われぬ采男も稱さる落着きか兩度の水難も身躰勞れ
 逐不病めを延びし十死一生の煩ひけり傳兵衛の素より女兒
 養も懇切不看病做し薬用油断あはせれも其驗ももあ
 日毎小重れよまれば親子へ悲しと醫師も取替服薬怠ら
 ざりけり一日醫師容躰と看りけり今此人の病も甚重なり
 獨參湯を不用と平愈の程是東なりとありけり

はれ病人が快氣做りたる人と醫師を歸し後親子商義は
 ちこれハ予今貧若小逼り其日とに小送り兼れ身あはるの程を
 奥捕も歇と金のも富もあはれ今采男とのふあはる人參を
 求るごとく難しきありとて眼前主人の大病着殺しせんハ臣の道
 おあはれに従ひ予一命不換るも祐進らせり想あはれ何とぞ
 金子や芝の手段もあるはしやと歎きけり兼も泪なごりし
 けりく妾漢子ももぐんが父上の助とらる事もありなんお何
 ぞとてあもあはる甲斐り死女の身あり如何とも金子や芝の便
 り一幣此上と不束ある吾身ありけり諛の碎銀もなりそ
 ら何地へなりとも身を贖ひ淳川竹の流しの身とも做し人參

宋男病
金吾親子
看病之圖



六代目吉屋角



自來世談話後傳卷之二

十

代としく主人の病苦を救ひおられしとありければ侍も大お
 歎と悲しび世の諺も四百四病の疾あやう貧程憂死のほしと
 ひとしも這者大切なれ主人の病ふみ身を苦しみ且その上お我れ
 貧の病ひも重ければ今更如何とも詮さばりけりおら主人の爲
 みの妻子の命も換は様いあれ權一の同汝君傾城の身と沈
 主人と救ひ進らせよ貧なればこそ帝一個の汝の身を賣せん
 こそ口惜く本意あるねど難面親と恨まば怨め主人の大事
 かつれどと男泣伏し沈む勿躰なれ父の命せ藁の上より
 父上の命も成長一の恩も報ひもやととけ方の助となれ
 更なると不孝の此身用立とも侍らぬ娼妓へ愚何ほどの憂れ

辛苦も厭ふはじ老早亡へ掛合く一刻も疾く薬と調くおつれ
 ぞと女児の諫め侍も侍も分とり直し今指當り外詮
 とふおられハ平ハこれより福近き邊りお大儀の曲輪の者あり
 あよーあれハ耶所お到て其筋の人よ渡り合はれおの上馬へと
 泣く我家と立おれ跡お女児も越方と想ひはばくさむぐと
 一個いさら悲しひ伏轉びくくく且説い世の中お妾など薄命
 かりののいおし生さかろくお母上お後と爺夫のよあてま立と
 邊りお女児ええええつ見更に結る髪象誰おと向ハ母人の取
 擡まふとやあつり妾も母の在りなハ髪や容象も繕いけり
 のと假顔やと明暮暮も母上を親子一世の死別と復且了

父上も生別れは做悲しき神も佛も我を又捨てりかたき
媚と独勤とくありけれが漸小顔を上我なり未練なり假
初も士の家も生を一身を持主人の爲の憂勤も歎く思
痴の至りごとく意中より直し父上の歸りも權一の間も有り
人ふ薬温めすいせんと泣目と拭の折をあれ主侍を請先小
立大磯千歳屋の主人長助媒と同所は無頼者蝦の銅八三個
打連轡と表不待せ置内小入りて女兒を能く打つる長助銅八
私言合符共術を外へ呼ばし彼此商義調ひく五年の年季を
金五拾兩小證文取極われ傳兵衛との更を女兒簀小説話小
ぞ女兒半貞も不惡顔泪を押し身仕舞做し還小轡小のり

移り金以下せむ流連小熬兼父上真成小坐し久黠也と言
を別どの泪千歳屋の金子を渡し轡小添大磯にこそ急れ
行侍を請はせ丁ごり暮ひ行後影入おくりも忽地上小倒
伏忍りし溜泪女兒堪忍し呉よと呼とばかりお泣叫かき理
とこそあふれされ見外の衣も空吹風と銅八の此小到り侍を請
と延起し互ひお是悟の上なれば泣き今更詮よばし借口入
の金子れ分口去未接んとありされ傳兵衛も泪を拂ひ段こ
足下の世話僅なごり謝礼ごとく金三兩あられの銅八を去返し
斯討の端金接く何うせん約せしごとく二十金ありよ必と抵頼
更なるれと寢徒かれば侍を請も憤り遠者不法なる漢子哉

媒人こそ憑けは何日二十金授んと諾ひしや予身あらはれ
 たりと言を發ら家不歸らんと倣も處と銅八ハ脊後より傳ま
 の髪柄捕り顛倒不意倒し自鼻も不分打擲を懐中北金子
 以延出し奪ひ取り逸散不逃行と傳兵衛を衝く起立窓
 賊よ道一ハヤい人し出合ひおわれと呼られも寂莫
 鄙道前後の家も隔且ハ袴も人もり紅霞小前面のか
 より深編笠不面と躲せし士一個此路程へおつりしが斯と
 看より走り走まゝ銅八と捕り去跟金賤布を奪ひ返し追
 跑めれ傳ま傳ふ夫とあへ疾行と言ふ傳兵衛押し寄る
 編笠の中坐面礼もそと病人も氣遣いと我家とに

走歸る其間銅八起より臍何故肩持と那士不跳獄と
 手練の中身お細ハ眼公意跟倒と観向もやと僻靜と
 見捨く過行士ハ一曲ありととと

朝妻歌之助到大磯曲輪併侶吉郎与歌之助娼妓
 買論之条

頃者相州大磯小磯化粧坂ハ遊女街麗を並べ鎌倉代に
 近御の浮男鬱氣を散ぶるの曲輪あり夜毎日こしお籠
 たり中あり大磯の千歳屋と因へ娼家の建文の頃より
 續くれ大家ふくせありるあろお援鳴金吾の女兒簪ハ此
 家小身を賣名も代衣とあたる新妓の抱女となりけり

器量勝と公も優しく伶俐生れられば昼夜客の役間も
 あく今此曲輪不全盛肩を双ぶりのなれ情知あく浪漁傾
 國の粧ひも客これが鳥ふら流と奪と魂を失ふりの後とを
 此先年越後國吳賢邑あく五十嵐曲膳と武術を試こも
 られとより其場より逃去し朝妻歌之助業文へ夫より何國を
 経巡り尋ねるも復亦武術歌修行と号し近日大磯曲輪へ
 到りしが不圖代衣の容色も公迷ひ一夜の情状亦んと例の不
 等風俗あく編笠眉深ふら被り井筒とつれ揚屋を以て
 此更と言遣と折柄勇侶吉郎も權し此邊あつて此はか鬱
 氣のあつり大磯の曲輪ふあつり那代衣と求りんと同く巴と

つけに揚屋よりりや近慈も編笠打かぐり十歳屋あつんと
 せり時歌之助も爰ふ到り表にゆく互ひ不行達し歌之助
 不附添あつりし井筒屋繁藏とつりりの遠更と知りて代
 衣を我方の皮も惹張んと想ひもづれば巴屋の挑灯と支へ停
 代衣大夫へ此方先約なれば其許の貴客を後より延連
 とありけしむ侶吉郎も從ひ巴屋常吉とつりりめも侶吉と
 代衣の客あせんと思ふにあつる処なれば答へつり先後を
 ちほれ金銀とつりり水、娼妓汝交りして貴客を待せあ
 ちり揚り詔あつんやち前ふ進む繁藏抱搬其方の貴客
 而己金銀と遣つりちありんこも心窩悪大尽風取除具とを

入んともせむと常吉も延庚一己に双方拳と撞撃合ひなん
 とく久けむとバ侶吉歌之助声と武く遠と制一歌と助のつづく
 汝連強く争ふ及々と大坐不到で娼妓小對面の上何と成
 と靡く靡く代衣の意ふあぶとと予のよと金の貯も
 許多とられが費も不厭風流とのと奴が身中あれハ勞浪士
 の黄金ふまそく一夜と争ひ求むの族不非婦人のく後お口
 んと予の予の足あれが先入んとの予を不停くせ進くを
 よと己と悟る言の傷小侶吉も公中半貞憤りとくれハ常吉
 あつとく予那女小意と奇とるわもあふねと此ほどは
 身小白痴の大言不圖捨も意氣地の曲輪一ツの慰とたれば

代衣と中んと是非予對方と做金銀あく面と張るの
 あつと予も俱ふ汚魂一たりと金を出し傾城白痴のつと
 小襟氣の友とあつと予んとあつとれ言を歌之物因然の白痴此
 汚魂のと予と指し罵るとや士小似合ぬ當言吐くより扱
 直く小言ふおや但し某と懼ると想つ故う春くれと通れ
 優漢子素より武術の得くけと十分億一多ひとと重あり
 廣言侶吉と歌ふ助ふじつ見外更小比く不言因の故も
 忌怖く腰や抜んと當言ふ因せが直あつとあつと云々人當今
 中せ一白痴と外ふもあつと足下の更斯云發のうへは
 其終も難止かんと去かると腰拔武士の腰刀も抜くとと

能くほりと朝言ふ歌之助那此と言戦の無益の論をいふ
 ずり此上を代衣と刃共の對方ふや一請人若引なす曲輪
 外の堤お到て腰劔おつけく接人とありれば侶吉も打突の
 汝等ごとく此と對手よか入人も司一痴漢の名を取らふ似ぬも
 斯云掛れも武道の意地去未隄さく同道せんと今と互ひお
 身繕ひ驚破更くも生まぬと看る處不斯とす坊々千歳屋
 より代衣の僻静お立いで二個の中よ分入くすくはさ妻
 故不歴くのさ方一断併か入くはさ刀の身前とんぞんふ且ど
 妾がよお取らふ何れどく氣の毒おこそけく数々も存も此争ひ
 権の中妾お頭けふられし復この経の斯く不束りる妻も

と揚詰の客入くは帝今何とも答へずいせん其も難
 か先く大坐へ入く一献取汲あつて代衣が扱ひお双方すじく
 公も解あふあふ予くか武道も立く恥辱とよぬ其許の捌を
 権一待やうんと言はははひ兩個と千歳の大坐へうら通りぬ
 且説吾川采男ハ猿鳴金吾の情や女児の身代と以て菜
 用息と親子の滅心届じおや九死一生れ痛漸く全扶做し人
 參代お通り女児取賣され事始めく関太ひ子驚き金吾子
 厚く礼派速女児養をも曲輪へ鼻の謝せんく大磯千歳室かりを
 お到り代衣お對面做られれば代衣も采男の快氣せしを欣躍
 此うへ采男も金子を調へ代衣の身繕なして因次報りん

ありけしとてい衣のつてく此程よけれ寛大盡と稱す客毒
 と揚詰みく大生の酒毒の對手と做しつてしが近末ハ清し
 く何所へ死とも遣一呉もよのこつたれば此人も懸身死もなり付
 らんほかたつと公の弟一あつて懸酒毒を出し数待らぬ
 の客人待詰つて追しお呼みあぞ先と這あ止まりの久後刻寛
 説詰りんと代衣を奥へ入りし跡を采男ハ熟く越方と必
 出せり汀の行詰も奈何なりしや心二拭て何卒此久盗賊自未也
 け在所を脱と見届搦捕人と想つち奥ハ噪の大陪侍はれ不
 何公なり戸の透間より半面看るあれハ筆頭持とて之と数多
 の人居並び正面ハ悠然と安座做一太盃次扱くる那大盡と

つれ客を能くう奴跟観るあれは這正しく前ハ浦の沖中
 出達とれ盗賊自未也たがひちりだれば大ハ欣悦還お踏切
 想ひつて復考つて汀の行詰も何と殊多勢の中へ
 予一個切て入つて渠を生捕責もかたはしを不如這事所の懸
 夫お訟へ夕勢を以て搦捕人と暗に此家と立出縣令廳へ走
 行ね借且朝妻歌之助ハ向齒及つて猿眼の醜と前髪より
 勇侶吉野ハ人品勇るま立端の士ハれどもけし衣も想ふやあ
 りや何とてものま登のあつたれが兩個ハ投換如何と待處
 子代衣より王章を以て兩個へ贈りつて今日まへ
 妻揚詰の身もけし明日よりハ身もけしなりとて去

なぐり、御両個一所に迎へはひせんともかちんへ圍取
一月代に通りひまらふありあれ時ハ公の底も討ち切り
へ深情の方へ靡とばらん夫々大坐而已勤意中汲せ
てありけし、斯のごとく上る今宵のあせ首尾悪く
明日井筒屋巴屋圍取河にも極置を今宵と我
立歸らんと歌之助侶吉も揚屋くお言合千歳ガハ立
出く右く丸へ引行あふ自來也み従ひて牽頭持
とつてわらハ衆皆小嘯浪の者どもかりワガ先切より歌之助
の動靜が窺ふも渠がはより多く金子賄へあれし一回
せを岡取却者の帰路に待請けり捨金子を奪ひにけり

嗜金とせんと思へとも渠自武藝勝且一廣言も發る一兩個
あふんえ朱が衆皆あれと小賊ども自來也あは這を躲し
首領一個残り置歌之助の後を慕ふく追跑行疾夜も三更の
頃あひ吾川采男案内にし先立捕手の吏職數十人大
門の門をせ出はく固め盜賊の首領自來也活捉んと
藏屋を取圍と番手と定めひ入るあぞ自來也ハ熟睡あり
けれ、斯とくより跳より進む捕手ハ二三個捕り去退け
采男おろく、汝前ハ海底に沈失しと思ひ一が如何と再ひ
此に到らば復汝が延連く汝を予が方止め、故那も執
公残り意恨あれ予がれ公えしとえれど十重九重取



この昔
秋之夕
むきよ
連賊鑑
番

巻とも早と揃補こと新ふはど那女汀とやう人も予が想ふ子細
あれは遂に歸りてなかなんぞら今何れど焦燥もも汝等
か意任せとて印紙結び呪文と唱ふと見えれば象と失く
あつたれは逃出をた路もなし其所よ此所よと上天下噪動
破しとて捜求めど自來也の其行方更ふ何處とも知れざり
され其夜も更渡り隄ふとてとて虫の音もいと寂莫曲輪外
宵も残る所程にけり夜半のの凄く歌之助へ管一個曲輪を
出く大磯の畔路を漂行脊後の方より声を掛權く待れよ
言更ありと呼停られ誰やんと立止つて看くあれど荒
くれ漢子の五六個歌之助も走り跟後前も立塞り今宵其

許の廣言も多く金子を貯めあれは半負費一娛人と曲輪
子入込けれよ一平くハ金子乏しく想ふ不任せぬの上るんが
借用せんと特、這まゝはうたり速く懐中の金子をよめ歸
られよと園中よりも歌之助惣身累いも擺振りも弱身
をよせとて鐙打鑿這者狼藉奴某と見違へや予ハ朝よ
歌之助業久とて武藝勝ると浪士なりとて女ホとて定當時
園も自來也とつたれ盜賊をよめ予をみすも通つてい逸
憂目をこゝろとてとて盡の根も合わ大言も小嘯嘖ども吹出
絶倒しつてつてつての如く我ハ自來也ハ屬賊なるがその
歌之助業久との美男のうらハ叙術名譽の達人ハ園おび

ほうしゆの術を以てあれが國に勝れ足下の生
 根洞不動く足擺振る大丈夫の魂傳へ我等も修行のくも衆
 言一同小切掛らんと對手と做す玉のれと朝すわく腰劔彼持
 身攘ふれば歌之助の呼と叫び聲く大地に尻居し悲し死声
 音公張あびくやよ待み人によ中と卒介も持病の痼積發
 てふれは真劔勝負の饒く給へ其代め懐中の金ふし衣
 服もふかぶりと賤布とり出し詭ふあぞ小賊も案れ外多れ
 億病者と呆色かつる衣服剥取金賤布を延出し改め觀
 示纏ふ金三兩ありわれは此外ふもけくあり人懐中を搜し
 えくも胴小巻とれ打違ひあり儲こそ爰に躲しりのりく意出

せむ取捨ありて此金を奪つれく予身も後へも前へも
 一餓死せんより外而じさうりくぐり申も金あることく
 一うの饒したすあはど困く此黄金と列位を度しん
 ば今より足下等の執成めて首領自來也大人小相目しめ
 中をも屬賊となりてあられし命替りれ此金と渡らん
 明日より路道迷ふ此身ひとふ列位と憑と付れば只
 一と一とと歎くあぞ衆皆うち笑ひ肺ごとく死腰の
 我に仲間入とて物の用も立まじられど首領自來也
 強悪と働けども復寛仁大度の志めれて斯く海軍に
 棄たく用ゆる處もあらず是れを今より我く小行ぐ

言言後編卷之二

あるべし一ツの首領の魁とあもたるべし痴漢なりと父服
多し金子ハ不残奪ひ取り小賊等と公取鏡一取の助は
ひく之浦の沖へぞ立帰れ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

自來也説話後編卷之二

